

教育DX時代における新たな学び

日本の教育が迎える、創造性と多様性の新紀元

デジタル化を超えて：教育DXの本質

DX（Digital Transformation）は2004年にスウェーデンのエリック・ストルターマン教授が提唱した「進化し続けるテクノロジーが人々の生活を豊かにしていく」という概念に端を発します。しかし、教育におけるDXは単なる「変革」ではありません。それは「デジタル・ディスラプション」——既存の価値観や枠組みを根底から覆す破壊的な革新を意味します。目的は、テクノロジーの導入そのものではなく、それによって人々の生活（学び）をより良いものへと変革することです。

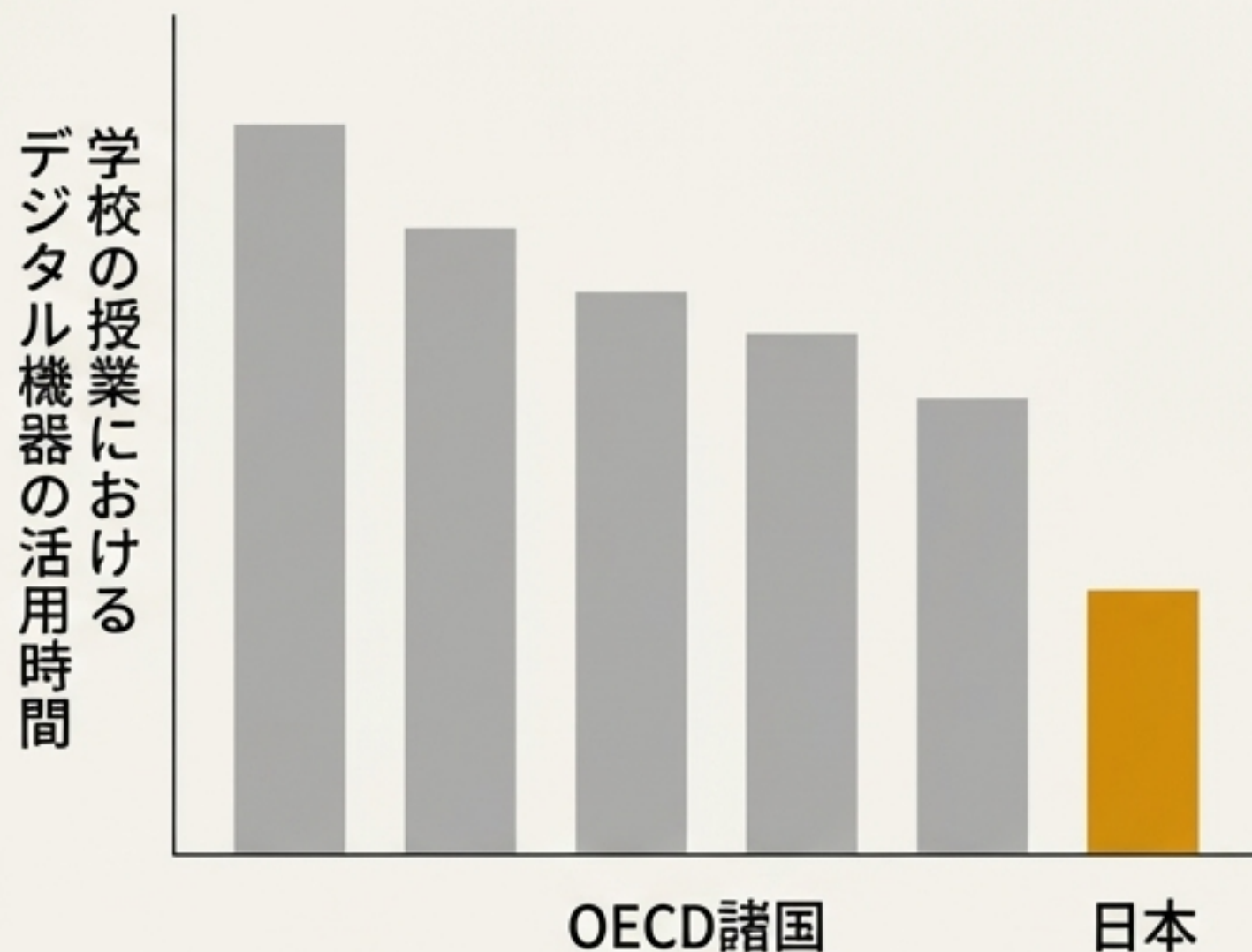


「ツールの導入」



「価値観と枠組みの再創造」

我々の出発点：デジタル教育における危機的な遅れ



OECD加盟国中、学校の授業におけるデジタル機器の活用時間が最下位。

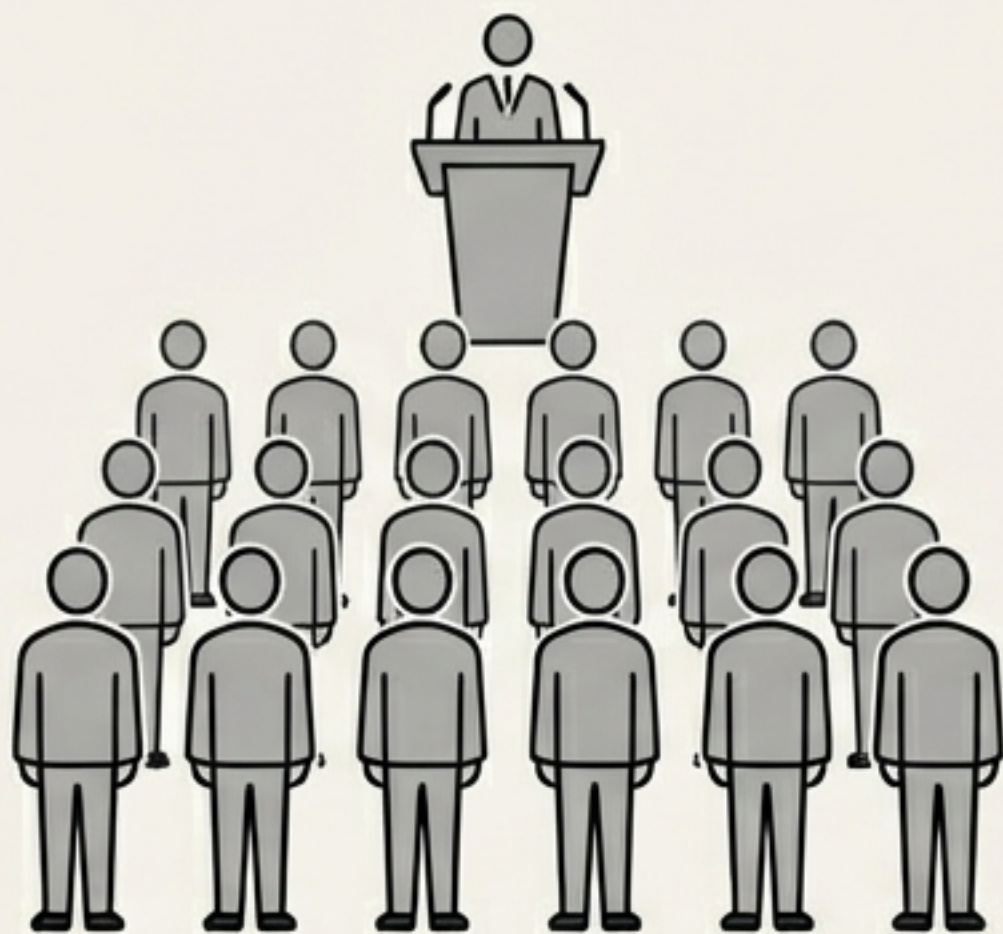


GIGAスクール構想発表当時、教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数は全国平均で5.4人。

この状況が、GIGAスクール構想を推し進める直接的な背景となりました。

「画一性」の限界から、「多様性」の解放へ

20世紀の教育モデル



全員に同じ教育を

21世紀に求められる教育



個々が持つ能力を最大限活かす教育

教育パラダイムの
転換



文部科学省のデジタル化推進プラン：未来への4つの柱

令和2年12月、文部科学省はポスト・コロナ期のニューノーマルに対応するため、DXを早急かつ一体的に推進する4つの方針を掲げました。



GIGAスクール構想の推進

1人1台端末の活用による
学校教育の充実



大学のデジタル活用

デジタル技術を駆使した
教育・研究の高度化



生涯学習のデジタル化

いつでも、どこでも学べる
社会の実現



教育データの利活用

EBPM（証拠に基づく政策
立案）等の推進

変革のエンジン：GIGAスクール構想

G **G**lobal
I **I**nnovation
G **G**ateway for
A **A**ll

その名は「全ての児童・生徒のための、世界につながる革新的な扉」。
単なる機材整備ではなく、子どもたち一人ひとりの可能性を
未来と世界に繋ぐための国家戦略です。

加速した導入：全ての子どもに、学びの扉を

児童生徒1人1台端末の整備

個別学習や共同作業の基盤を構築。

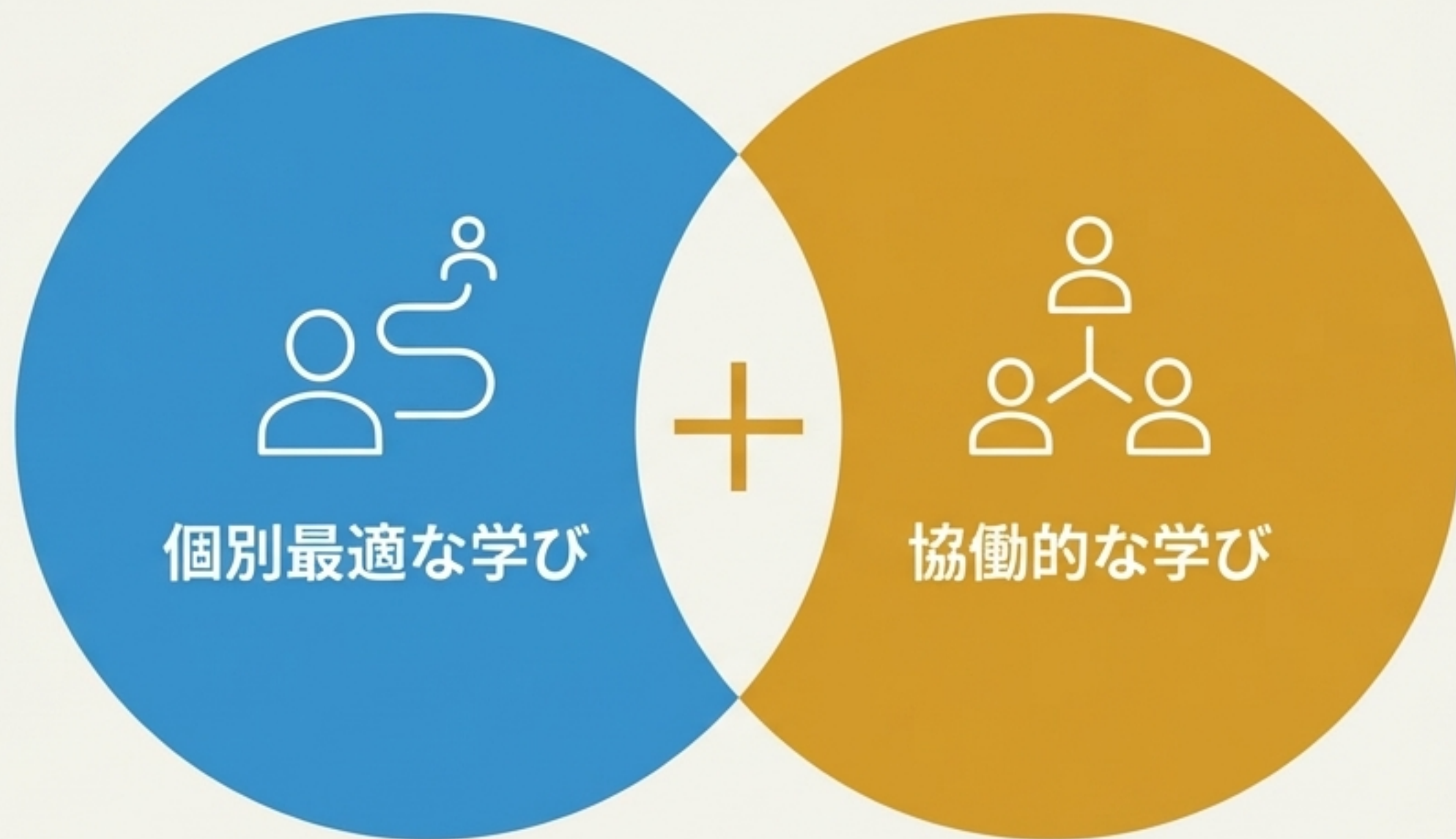
高速大容量の通信環境の整備

校内LANと家庭への接続を確保。



教育DXが目指す究極のゴール

Society 5.0時代を生きる全ての子供たちの可能性を引き出す、
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現。



学習観の進化：20世紀から21世紀へ

20世紀

行動主義・認知主義

知識の伝達・インプット中心

学習観の移行

21世紀

構成主義・社会構成主義

主体的・対話的で深い学び
の実現

新たな学びがもたらす3つの変革



1. 個別最適な学習

子ども一人ひとりの学習状況や理解度に応じたコンテンツや教材を配信し、個々のペースで学びを深めることが可能に。



2. 活発な協働

端末を通じて互いの考えをリアルタイムで共有。双方向の意見交換が活発化し、多様な視点から学び合う文化を醸成。

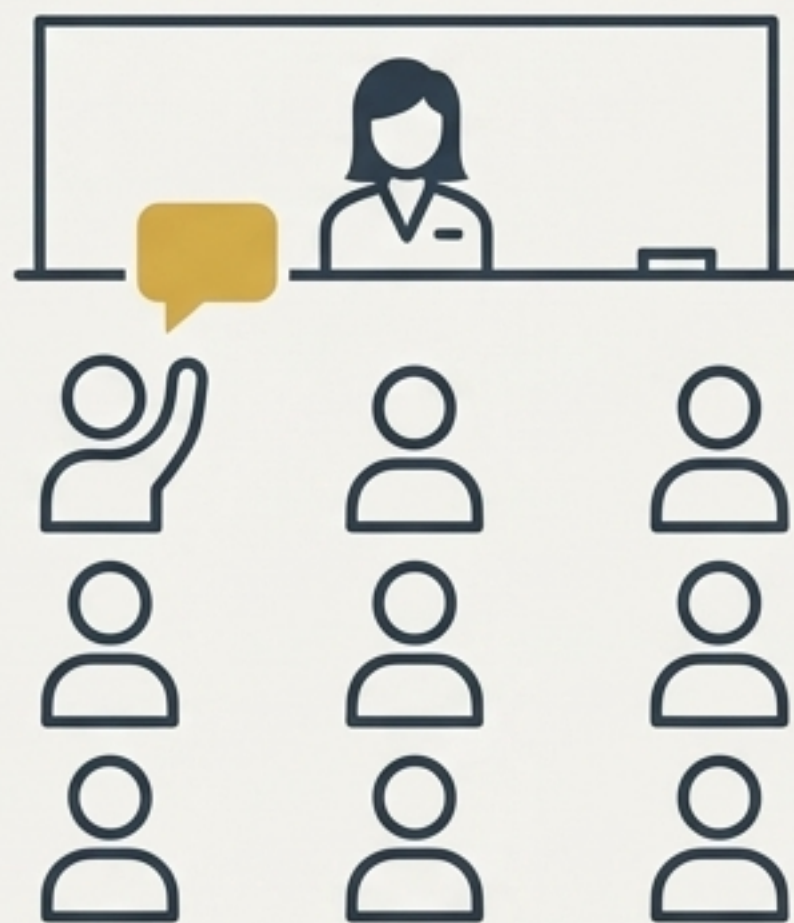


3. 創造性の育成

情報を調べる、動画や資料を作成する、発表し共有する。テクノロジーを「学ぶためのツール」として活用し、創造的なアウトプットを促進。

沈黙から対話へ：すべての子供が「発言者」になる教室

従来の一斉授業



手を挙げた子供だけが意見を発表。

GIGAスクール構想



全ての子供の意見が共有され、
コミュニケーションが活性化。

教科書を越える学び：自ら探求し、創造する力

ICTは一方通行で「教える」ツールではなく、子供たちが自ら「学ぶ」ためのツールです。



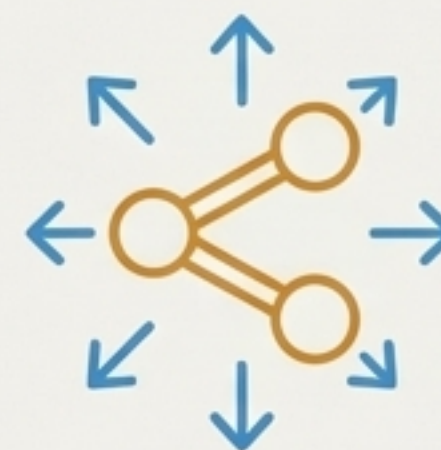
探求 (Research)

興味を持ったテーマを深掘りし、多様な情報源から知識を収集。



創造 (Create)

調査結果を元に、プレゼンテーション資料や動画コンテンツを制作。



共有 (Share)

制作したアウトプットをクラスメイトと共有し、フィードバックを通じて学びを深化。

滋賀県草津市の事例：「タブレットを活用することで主体的かつ対話的な学習が可能になり、大きな効果を発揮する」

未来へのビジョン：「新たな学び」が教育のスタンダードへ

「1人1台端末環境は、もはや令和の時代における学校の『スタンダード』であり、特別なことではない。これまでの我が国の150年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のICT教育を取り入れ、これまでの実践とICTのとのベストミックスを図っていく。」

「この“新たな学び”の技術革新は、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びにも寄与するものである。」

— 文部科学大臣メッセージより

次なるフロンティア：「ハードウェア」から「ヒューマンウェア」へ

端末と通信環境という基盤は整った。次の焦点は、その活用を最大化する「ソフト側」の高度化です。

1. 教員のスキル向上

ICTを効果的に活用するための研修とサポート体制の強化。



2. コンテンツの充実

多様な学習ニーズに応える、質の高いデジタル教材の開発。



3. データ駆動型教育への転換

教育データの利活用（EBPM）を通じ、個人の学びや教師の指導を科学的に改善。



ハードウェア基盤（GIGAスクール）

日本の教育トランスフォーメーション：その軌跡と未来



課題 (Challenge)

深刻なICT環境の遅れ



解決策 (Solution)

GIGAスクール構想による
1人1台端末の実現



変革 (Transformation)

「個別最適な学び」と
「協働的な学び」への転換

Society 5.0時代に向けて、すべての子どもの可能性を最大限に引き出す教育の実現へ。